

株式会社キャリアリンクの若江です。6月30日開催の教育課程部会への参加が適いませので議題（1）特定分野に特異な才能を持つ者に対する指導及び支援の在り方について書面にて下記に意見を申し上げます。

「社会に開かれた教育課程」と表現された日本の教育の転換において将来の社会の担い手として、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない、個別最適化された学びが重要視され、多くの教育委員会や学校の教育方針に掲げられています。

これまでは、心身に障害があり支援を必要とする児童生徒や、不登校の児童生徒などへの個別対応に関心が寄せられていましたが、本日の東大先端研福本さんからの発表の異才発掘プロジェクトROKETのように、平等性を担保する個別化教育による特異な才能を持つ子供たちへの学びについても、近年注目が高まっています。

履修主義、年齢主義の教育で取り残されていた、個性ある子どもたちも総合的な学習の時間・総合的な探究の時間での社会と関わるプロジェクト型の学びにおいて、実社会同様、それぞれの個性や特性を生かした役割を担うことで、グループやクラス、ひいては社会における自身の存在自己認識していくことでしょう。

学校という学び場でもっとも大切なことは、協働的な活動を通して、自他を認め、よりよく社会と関わる資質・能力を醸成していくことであるはずで。

一方で、GIGAスクール構想に加え、コロナの問題もあり、学校教育におけるICT環境が一機に整いはじめ、コンテンツの提供と運用が容易であることから、オンライン授業やドリル学習などによる知識・技能習得に注目があつまり、実践も急増しているようで、あたかもそれが個別最適化の王道のようにになっていることには少々違和感を感じています。

学校教育において実現すべき個別最適な学びとは、個人の知識の先取りや学びの合理性の追求ではなく、さらには、個性を持つ児童生徒が独自の学びを探究することでもないはずで。

常に同じ学級、学年の児童生徒学ぶという過去のスタイルに縛られず、目的に応じてICTを効果的に活用しながら、児童生徒一人一人の学習進度や個性に応じた新しい学習への参画のあり方を追及するべきだと思いますが、個の追求ではなくプロジェクト型の探究活動など協働的な学びに還元される、全体最適につながる個別最適化された学びの視点を忘れてはいけなではないでしょうか。